
インドア天使

オレンジ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インドア天使

【Nコード】

N2802W

【作者名】

オレンジ君

【あらすじ】

私、松葉 真里亜はある日突然、天使になりました。飛べない天使はただの人！？こんなダメ天使の隣人はエルフ！？マッシュンゴとゲームの中に飛ばされ、住人がファンタジーに！？この先どうすれば良いのかも分からない。手探りの生活が今始まります。

ブローグ「とりあえず天使で」(前書き)

2011年9月2日、一部修正。

「ブローグ」とりあえず天使で」

今、私は自室でパソコンの前に座っている。これは私の日課だ。毎日大学の講義が終わると友人とのおしゃべりもそこそこにしてすぐに帰宅する。

友人からは付き合いが悪いと言われるけど止められないから仕方が無い。

そう、私の心を挟んで放さないのはオンラインゲームだ。ネット上で不特定多数のプレイヤーがチャットを通して会話、モンスターを倒してレベルアップ、イベントやスキルの獲得、ギルドに入るのも良いだろう。とにかく色々な要素があって面白いのだ。

そして今日もまた電腦空間と言う名のダンジョンを冒険するのだ。

あ、ちなみに私は引き籠もりではないからね。ちゃんと講義にも出席しているし、友達とも遊ぶ。ただインドア派なだけ。

ちなみに私の名前は松葉^{まつば} 真里亜^{まりあ}一人暮らしの大学2年生です。

私が住んでいるのは円筒形で18階建のマンション。本来ならちよつと高めの部屋んだけど市からの補助金で学生だけは安くなっている。そのせいか住民の6割が学生になっちゃって学生寮みたいな雰囲気だ。

て、そんな事はどうでもいいのよ。今日はサーバーメンテナンスの日だからしばらくいつも私が遊んでいるゲームができない。やる事がないのでオンラインゲーム紹介サイトを流し見る。そして私はふと“それ”に目をとめる。“それ”には説明文が無い。挿絵も無い。訝しく思い“それ”をクリック。

「え」と何々、THE ABSORPTION OF WORLDへようこそ。えっとこれは世界の吸収って意味かしら？」
そこに書かれていたのはこうだ。

“ 現在運営準備中のためログインできません。ただし、キャラクタークリエイイト機能のみ使用可能。”

「なによこれ。アバター作って待ってるって事？まったく準備出来てから紹介しなさいよ。え〜とキャラクタ〜あつとこれね」

ブツブツ言いつつ、さっそくクリエイイト。

「え〜と、名前：マリア、性別：女、次は種族ね〜」

人間

エルフ

ドワーフ

「うん、このあたりは順当ね」

獣人

鬼人

「鬼人？獣人は分かるけど、鬼？魔族とかかな〜」
どれもありきたりだと思っていたらその下にもまだ項目があった。

先着100名様サービス

「先着？こんなの見たことない。何だろう？」

好奇心に任せてクリック！すると、

“ おめでとunggございます。あなたは99人目のお客様ですので、先

着サービスの該当者となります。”

「おわっ！ぎりぎりセーフ。どんなサービスだろ」

上記以外の新種族の創造

注：このサービスを受けると初期装備が無くなります。

「初期装備が無くなるのか。でもまあ、自分で種族を創れるのは面白そうかな」

考える事、5分。

「んゝ何にしよう。いざ決めると言われても。上の選択肢に無かったやつで良さそうなやつは……………」

しばらく考えた末。

「とりあえず天使で」

種族を決めた後は特に何も無くクリエイト完了。そのころにはメンテナンスも終了していたので、いつものゲームにログイン。何時ものようにパーティ組んで冒険をした。

ログアウトした後に先ほどキャラクタークリエイトをしたサイトを見ておいたが相も変わらず準備中。そんなにすぐ完了するとは思っていないのでその日はそのまま消灯。

その後、翌日もその翌日も何も変わらず準備中。終いには二カ月も経過し、そのころには真里亜もそのゲームの存在さえ忘れかけていた。

しかし、事件が起きたのはちょうどそのころだ。いつものように冒険しログアウト、宿題のレポートも済ませベッドに入る。いつも通りだ。しかし日常が続くのはその夜までだった。

翌朝、視界に入るのはいつもの天井だ。しかし何か違和感がある。天井にはない、自分にだ。布団をめくるとそこにはすっぽんぽんの自分がいた。

思いもよらない事に絶句する。

「何!？」

一瞬固まるがすぐに再起動する。

「昨日はたしかにパジャマを着てただけどなぐ、寝相で脱いだのかな?でもこんな事今まで無かったし、変質者!?はあり得ないし」

首をかしげながらタンスから服を取り出す。来ていた服が突如消えるという怪奇現象に遭遇したことに多少ビクビクしながらも空気を入れ替えるためにカーテンと窓を開けた時、本日2度目の絶句が待っていた。

窓の外は森林だった。しかも幹の直径が車くらいある大木である。高さもおかしい。

ちなみに真里亜の部屋は15階にある。そのベランダと木のとっぺんが同じ高さにあるのだ。

「嘘でしょ……………」

あまりの事態に茫然と立ち尽くしてしまう。直後、部屋のインター

ホンが突如鳴り響き猫の様に飛び跳ねてしまう。恐る恐るモニターを覗き込むとそこにはエルフが立っていた。

第1話「となりのエルフ」

インターホンのモニターの向こうにはどう見てもエルフにしか見えない人が立っていた。

エルフなんて生で見たことないけど……………。

そのエルフは顔の側面に先のとがった長い耳、人間とは違う細く鋭い顔の輪郭、あと金髪ね。それと着ている服も見た事がない。

どこか民族衣装を思わせるもので、まさしくゲーム内でエルフが着る様な服装だ。

そんなエルフが何の用？て言うか何でインターホン使えるの？

とりあえず、応答してみよう。危険な奴なら開けなきゃいいだけだし。現代の防犯設備なめるなど言いたい。

「もしもし…………」

恐々話しかける。すると、

『あの、真里亜さんですよね』

向こうも恐々話しかけてきた。ちょっと待て。なぜ知っている。表札には名字しか書いていないのに。

私が驚き硬直していると、

『僕ですよ。竹山^{たけやま} 聖^{ひじり}です。こんな姿で分らないと思いますけど』

え？聖君？聖君というと隣に住んでいる高校一年生の男の子の名前だ。

たしかに言われてみると声がまったく同じだ。

「本当に聖君なの？」

『はい、朝起きたらこんな姿になってまして』

話し方も私の知る彼の口調と同じだ。どうやらモニター越しのエルフは本当に聖君のようだ。すぐに玄関に向かい扉を開ける。するとそこにはモニターで見たエルフが少し緊張した様な表情で立っていた。

「あ、あの真里亜さんですよ。」

訪ねておいて、いきなりこの質問。

「それは私が貴方にする質問じゃない？」

「あの……鏡見ましたか？」

「鏡？まだ見てないけど」

「だったらすぐに見た方がいいですよ」

失礼な。寝起きだからって誰だか分からない程酷い顔じゃないと思うんだけど。

そう思いつつも洗面所に向かい、鏡を見る。

「誰？」

そこに映っていたのは、私の知らない銀髪の美女だった。

私が鏡の前で困惑していると、聖君が洗面所に入ってきた。

「やっぱり、気づいてなかったみたいですね」

「ど、どういう事？何がどうなってるの？」

「と、とりあえず落ち着いてくださいよ。僕にも何が何だか分からなくて真里亜さんに何か知らないかと聞きに來たんですよ」

聖君を問い詰めるが、どうやら彼も何も知らないらしい。

新たな謎に茫然としていると、彼が私の頭を見ている事に気づく。

「何？どうかしたの？」

「その頭の上にあるのは何ですか？」

頭の上？再び鏡に顔を向けると、さっきは銀髪と容姿に全意識を持っていたがよく見ると頭が光っている。正確には頭の上のリングが。俗に天使の輪と呼ばれているものだ。

「へっ？」

天使の輪？なんで？どうして？どうなってるの？

正体を確かめようと、輪に手を伸ばし掴もうとするが。

そのまますり抜けてしまった。なんどやっても掴めない。どうやら実体は無いようだ。

その後、いつまでも洗面所にいるわけにもいかないのでリビングに移動した。

一応言っておくけど、聖君とは付き合っているとかじゃないからね。お隣の好で時々勉強を見てあげているだけ。それとゲーム仲間。よく一緒にパーティを組んだりする。

聖君は今、リビングで私のノートパソコンで何か調べている。私とはいうと朝食がまだだったので台所で調理中。聖君もまだの様だからついでに作ってあげる。

現状確認は食べながらということ。腹が減ってはなんとかってねん？電気や水道が使えるのかって？答えはイエス。なぜだか使えました。

ちなみにこのマンションはソーラーパネルによる自家発電をしてお

り、無理をしなければこのマンションで消費される電力ぐらいならカバーできる。もちろんオール電化。

水も、雨水を屋上にある巨大な貯水タンク（ろ過機能付き）があるから大丈夫だろう。非常用だから4日分くらいしかないけど。

さて、朝食もできた事だし食べますか。PCと睨めっこしている聖君のもとに朝食をもつて行く。

「何か分かった？」

「はい。インターネットはまったく繋がらないんですけど、これだけは繋がったんですよ」

そう言うときPCの画面を私に見えるように動かす。そこにはこう書かれていた。

“THE ABSORPTION OF WORLD”

「これって!」

「あれ？真里亜さんも知ってたんですか？」

「うん。えーと、2カ月くらい前にキャラクタークリエイトして」

「僕は1カ月前です。その時作ったキャラがこの姿なんですよ」

「そうだ思い出した!どっかで見たことあると思ったら、自分で考えたんだ!」

「忘れてたんですか……」

聖が若干呆れた目で真里亜を見る。

「仕方ないでしょ、2カ月前も前の事だし、ずっと準備中だったし」

「まあ落ち着いてくださいよ。とりあえずご飯にしましょうよ」

というわけで、コーヒー片手に情報整理。

「まず、マンションの周りが大樹林になっていて、私たちの身体が

THE ABSORPTION OF WORLDでキャラクター
クリエイトした時の姿になって……。そっ
いえばその服どうしたの？」

ふと気になったので聞いてみる。

「あれ？起きた時に着てませんでしたか？」

え？なにそれ。

「着てないわよ。というか起きた時は全裸だったし」

そう言うと聖君は私の胸に視線を移し、何か妄想している様子……。

私は聖君の足の甲に思い切りかかとを落とす。

「ぐわああっ！」

「本人の目の前で裸を想像するなんて、いい度胸しているじゃない」
痛みに根絶する彼をフンツとにらむ。ちなみに私はCカップ。いやいやそんな事はどうでもよく。どうして私は全裸で、彼はあんな服を……

「あー！」

「どうしたんですか？」

いきなり大声を出した真里亜にびっくりする。

「思い出したわ！確か注意事項として初期装備が無くなる様な事が書いてあった」

「な、なんですか初期装備無って」

「そつか。あの時私で99人目だったから、その1カ月後に登録した聖君は知らないんだ」

「何ですか99人目って」

そして、先着100人限定サービスの説明をする。すると彼は悔しそうに言った。

「いいな。僕ももう少し早く登録していればな。その時点で後1人Okだったなら教えてくれても良かったのに」

「今はそんな事言っている場合じゃないでしょ」

「そうですね。てか、あれ？天使なのに羽は無いんですか？」

「羽？」

言われてみて気づいた。そう、色々と気付いたのだ。

私はバツと立ち上がると聖君に何も言わず自分の部屋に駆け込む。

そして急いで着ていた服とブラをとると姿見の前で身体を捻る。

すると、ありました。私の背中に天使の羽が。ただし、小さい。それはもう小さく、片翼の大きさと掌と同じくらい。イメージ的にはちょうど掌の付け根を合わせたみたいな感じの羽が背中に付いています。どうして言われるまで気づかなかったのかな？余程動揺していたみたい。言われてみると羽とブラの位置が微妙に重なっていて違和感があった。試しに動かしてみると、ヒョコヒョコ動きます！ちゃんと神経も通っているみたい。そうやって遊んでいると不意に部屋のドアが開き聖君が入ってきた。

「あゝ、どうかしたんですか？」

お分かりだろうか。私の部屋はドアの反対側に姿見がある。私は姿見に背を向けて首を捻っている状態。すると身体の前はドアの方を

向いているわけで、鏡越しに聖君と目が合ったりするわけ。そう
なるとやつぱり。

「きゃあああああ」

私は机の横に置いてあったゴミ箱を聖君に向かって全力投球。ゴミ
箱は見事顔面に命中。鼻から噴水が出ていたが知った事ではない。
私はすぐにドアを閉め、服を着る。

「あのエロガキ！」

「まったくもう、次は本気で投げるからね」

聖君は今、私の横で正座している。私はというと朝食を片づけ、リ
ビングのソファアーの上でPCと睨めっこ。

「あれで本気じゃないんですか」

「何か言った？」

「いえ、何も。お陰様でよりリアルな妄想が出来るようになりまし
た」

パソコン！手元に置いた空のゴミ箱で直接殴る。

「ぎゃああああ、鼻が、鼻が」

鼻を押さえてのたうち回るが知った事ではない。というか彼の性格はこんなだった？

思春期なのだから多少は仕方ないかもしれないけど、エルフになつて拍車がかかってない？

気を取り直して再びPCに向き直る。どうやら“THE ABSORPTION OF WORLD”のサイトで所持アイテムやスキルなどの確認ができ、倉庫の代わりになっているみたい。

私の倉庫には何も無い。聖君に許可をもらい彼の倉庫を確認するとありました、初期武装と思われるものが。ただの弓と矢70本。何の効果も無い初期武装。びっくりしましたよ。PCを通して弓矢が突然目の前に現れるんですよ。それと彼の着ている服は私が着ている服と比べて防御力が高いだけで、特別な効果はないみたい。

もうここまで来れば認めるしかないわね。薄々はそうじゃないかと思っただけ、これだけ物証を見せられると。

「もしかしなくても私達、ゲームの中に入り込んだんじゃないの？」

「いえ、僕達だけじゃないですよ」

「どういう事？」

「玄関の外を見れば分かります」

玄関の外？何があるんだろうと思いつつ、扉を開ける。

このマンションは筒型をしている。簡単に言うと。ドーナッツを積み重ねた様な形だ。もちろん中心には中庭があり、空に向かって空洞が続いている。通称ドーナツマンション。某百十の王マンションに対抗して造ったとか。エントランスホールの傍には、ライオ

ンではなくドーナツの像が置いてある。前にも言ったが真里亜の部屋は15階にある。その隣に住む聖も同じだ。何が言いたいのかというと高い位置にあるので下階が良く見渡せるのだ。

今私は下階を見降ろし、信じられないモノを見ている。そこには人間に交じってエルフやドワーフ、犬耳猫耳の人など、いる事があり得ない人たちが到る所で私達と同じように困り顔で話し合っているのだ。

またしても驚愕していると聖君も玄関から出て来た。

「どうやら、この住人全員がゲームの中に入っているみたいです」

第2話「塔の上のゴブリン」(前書き)

2011年9月2日、一部修正。

第2話「塔の上のゴブリン」

「なんで……」

思わずそう洩らしてしまった私の眼には、マンション内を歩き回る亜人達が映っています。

「どうなってるんでしょうか？」

後ろに立つ聖君が私に聞いてくるけど、私にも分からない。

「まあ“仲間がいた”って事で少しだけ安心したかな」

「だけど、この後どうするんですか。他の人達を見てるかぎりだと僕らみたく何も知らないみたいですし」

「そうね。このまま2人で考えていてもしょうがないから、不本意だけどあの人の処へ行くわ」

「あの人？」

「そう。あの人」

私は家の中から帽子をとって来るとそれを被り施錠する。

「あれ？どうしてそんな物被るんですか？」

「だって、頭の上が光ってるのって恥ずかしくない？」

「そうですか？」

いや、だつてねえ。頭光つてると毛根に不自由しているみたいじゃない。

そんなこんなで聖君を連れてこのマンションの最上階・18階に住む“あの人”のもとへ向かう。

「その人は私にVRMMORPGを教えてくれた人で、私の大学の先輩なの」

移動しながら簡単に説明をする。

「かなり優秀な人らしいんだけど、変わり者だから」

「だから不本意なんすね」

「まあ、悪い人ではないんだけどね」

話しているうちにあつという間に18階につく。3階しか離れていないのだから当然か……。

呼び鈴を鳴らす事に一瞬ためらうも、すぐに鳴らす。すると僅か数秒で扉が勢いよく開いた。

「ちよつと先輩！いきなり開くとビックリするじゃないで…す…か
………」

抗議の声を上げるが目の前の人物を見てしだいに声が小さくなった。目の前にいたのは小鬼だ。身長は私の腰くらいまでしかなく、耳がエルフほどではないがとがっている。腕は長く床についており、おでこのちよつと上のあたりで黒髪の間から小さな角がのぞいている。

「お前の事だからそろそろ来と思っていた。それと、そいつは誰だ？」

目の前の小鬼が私に向かって話しかけると、私の背後を覗き込むように身体を傾ける。

「あの梅森先輩ですよね……………」

質問ではない。確認だ。なんせ顔が普段とまったく同じだからだ。

「そうだ」

黒縁眼鏡を押し上げながら即答する。

はい、確認とれました。この人、ゲームでも自分と同じ容姿設定にするから分かり易い。

「えーと、この子は私の隣に住んでる竹山^{たけやま} 聖君^{ひじり}で……………」
「いつまでも立っているのもなんだろう。とにかく入れ」

最後まで聞くことなく、スタスタと奥に引っ込む小鬼。
おのれ、自分から聞いておいて聞かずに戻るとは…………。

「ふっ、ふふふふ……………」

「と、とりあえずお邪魔しましょうよ」

私は聖君に押されるように中に入っていく。中の様子を見た聖君は驚嘆する。

ガラス製のテーブル板に銀色のパイプ足。黒いリクライニングソファ。オシャレな本棚。部屋を彩る観葉植物。きちんと整理され無駄がない。

「おお、なんか出来る男の部屋って感じがしますね」

まあ事実、先輩は出来る男んだけど。料理をはじめとした家事全般はもちろん、勉強だって学年で1、2を争うほどの秀才だから。

ただ、生粋のゲーマーで変人だけど。

「適当に座ってくれ」

聖君がリビングを見渡しているとキッチンからお盆に紅茶を載せた、梅森先輩が出てくる。

私たちは並んでソファに腰掛け、先輩は向かい側に座る。

「では改めて、私は梅森^{うめもり}仁^{じん}。真里亜と同じ大学の3年生だ。外見は小さい鬼人族。さしずめ小鬼と言ったところか」

先輩が聖君に軽く自己紹介をする。

「あ、はじめまして。竹山 聖、エルフです。よろしく願いします」

聖君も簡単に挨拶をする。

「でも、いいんですか？僕までお邪魔して」

「ああ、真里亜が連れて来たというのであれば何の問題も無い」

あれ？意外と信頼されてる？

「あ！もしかして2人は恋人同士なんですか？」

先輩の返答から何か気付いた様な顔になった後、いきなりこう言った。

「違うから！断じて違うから！ちよつと！『そんな分かってますよ』みたいな顔しないで！」

私が否定するが、聖君は照れ隠しだとも思っているらしい。

「確かに長い付き合いだけれども、別に付き合っていないから！」

「ふむ、確かに。かれこれ5年になるか。まあ、ほとんど遊びの付き合いだな（ゲーム的な意味で）」

それを聞くと……

「お、大人の付き合いですか。分かります」

「間違ってるよ！ていうかそんな不純な関係を理解するなあ！」

はあ、はあ。駄目だ！このままではツツコミという激しく体力を消耗するポジションになってしまう。

「落ち着け真里亜。話があるんじゃないのか？」

そうだった。危つく目的を忘れるところだった。

「はい。先輩なら私達より詳しく今の状況を理解しているかと思つて」

「なるほどな」

先輩は紅茶を一口飲むところ切り出した。

「そうだな……。2人は“THE ABSORPTION OF WORLD”のサイトが繋がっているのは知っているか？」

「はい。お互いの倉庫を確認しただけですけど」
「そうか。ちょうど私も確認作業をしていたところだ。どうせだから一緒にやろう」

梅森先輩は立ち上がるとリビングから通ずる扉の一つを開ける。その部屋は先輩の特別製で、壁一面が一つのスクリーンになっていてそれ用のスピーカーまで付いている。元々は映画の鑑賞用だったそうだが、今ではゲームにも使っているらしい。正直、やり過ぎだと思うが大迫力になるためPCの小さい画面よりもずっと面白い。聖君は口をあんぐりと開けているが、私は慣れたものでスクリーンの正面にある複数人用のソファアの先輩の隣に腰掛ける。それを見て聖君も私の隣に慌てて腰掛ける。

「そうだな。まずは私の倉庫内のアイテムは……」

【倉庫】

銅の短剣×1

「普通ですね」

「まあ、最初だからな」

「僕の場合は弓でしたけど、これってランダム何ですかね？」

「どうだろうな。確かに武器選択画面など無かったが……」

これなら普通に台所から包丁持ってこればいいのではないかと思っただけは私だけ？

「そう言えば何故、真里亜は私服なのだ？」

「あゝ、えつとこれはサービス特典で……」

「なんだ。人間ではないのか？」

そう。私の姿は輪つかと羽を隠せば人間にしか見えない。私が帽子を脱ぐと今まで隠れていた天使の輪が露になる。

「なるほど、天使か。お前らしいな」

「あれ？そう言えば、どうして先輩はこの姿の私を見て私だと気づいたんですか？」

「正確にはお前の姿で判断したわけじゃない。このマンションの周囲には森しかなく、私たち以外の存在、少なくとも人間且つ私の知り合いがいるとは思えない。そして、このマンション内で俺を訪ねて来るような奴はお前しかいない」

「アンタ友達いないのか。まず、そう思ったが口にはしない。しかし……。」

「もしかして友達いないんですか？」

「いた！勇気と蛮勇を履き違えるバカがここに！」

「はっはっは。まあ少なくともこのマンション内に友人と呼べるものはいないな」

「まあ、ある程度親密になると面倒見の良さが分かって来るんだけどね。」

その後、もう一度画面に向き直る。

「ふむ。どうやら個人に関するものは倉庫しかないようだな」

「真里亜さんの倉庫は空、僕の倉庫には弓矢、梅森さんの倉庫には銅の短剣。あんまりパツとしませんね」

「まあそう言うな。さて次はこの世界の情報だな」

そう。この情報が一番大事になって来る。今後の私たちの行動方針が決まるのだから。

まず、種族について分かった事。これは私たちが今までプレイしてきた物とほとんど変わらない。ただ、私たちがゲームのキャラクターの姿をしているが実際に生きているという事。これが如実に表れる部分があった。繁殖力だ。高い順に人間、獣人、ドワーフ、鬼人、エルフらしい。また、繁殖力と寿命は反比例するらしい。

分かったのはプレイヤーが選択すると思われる、この5種族だけ。残念ながら天使やモンスターなどの情報は一切なし。こんちくしゅう！

その次に分かったのがこの世界は完全スキル制だと言う事。

つまりLvはなく、装備やスキルによって能力が決まると言う事だ。そしてスキルにはLvがあり最大で10であること。強くなったり上手くなったりするためには、訓練や練習を必要とする。つまりは現実と同じように練習しろと言う事らしい。

そして魔力。これは生まれた時に保有量が決まっていて、どれだけ訓練しても増えないらしい。例外はアイテムや装備品での強化。私たちの場合はキャラクタークリエイトの時に知らず知らずのうちに決まっていたらしい。

うん。ゲーム内での私たちの能力は分かった。いや、訂正。個人データは無かった……。

問題はこれがゲームではなく現実であるという事。ゲームなら死んでも蘇る事が出来るけど、ここではどうか分からない。蘇生の魔法があるかもしれないけど、それを使える状況でなければ本当に死ぬかもしれない。そもそもそんな魔法があるかどうかも分からない。ああ、もう嫌だ。こんな世界でどうやって生きるの。帰りたい。で

もここが帰る家だし。どこに帰るの？お母さん……。駄目だ。どんどん気分が暗くなる。ああ、涙も出て来た……。

すると……

「真里亜さん、元気出してください！」

「グスッ。ほえ？」

「映画やアニメだと主人公はこんな時前向きに考えますよ。じゃないと、ストーリーが進みません」

何を言っているんだこの子は？

「聖の言うとおりだ。何か行動しなければ事態は好転しない。心配するな私たちがついてる」

先輩も……

「そんなセリフ恥ずかしくないんですか？」

「何を言う。映画では定番じゃないか」

梅森先輩が眼鏡をクイツと押し上げる。そんな様子がおかしくて……クスッ

「でも、そうですね。おかげで少し元気になりました」

「そうですよ。真里亜さんは笑顔が一番似合ってますよ」

となりで聖君がサムズアップをしている。ていうか……。

「あれくもしかして口説かれてる？」

「えっ！いや、別にそんなつもりでは……」

何だかアタフタしだした。こういうところが可愛いんだよねあ。

「ふふ、冗談よ。ありがとね」

思わず彼の頭を撫でる。が余計にアタフタしてしまった。

「和んでるところ悪いが、今後の方針を考えたいのだが」

隣から先輩の声が……。

「あはは、ごめんなさうい」

「まず最大の問題は食糧だろう。帰れる帰れないは別として、水も食料も2、3日は大丈夫だがそれ以上となると調達してくるしかない」

「そうですね。水に関しては、幸い森の中だから近くに川があるのでしようし、食べ物も探せば見つかるかも」

「そうだな。樂觀する程でもないが、悲觀する程の状況でもない。後は役割分担だな。下階の住民とも協力し、水・食糧の確保、周囲の搜索、炊事まだまだ挙げればきりがなし」

そこまで言うつと聖君が何かに気づいた様で

「僕達はキャラクリエイトしましたけど、それ以外の人はどうなっ

てるんでしょうか？さっき見たかぎりだとエルフとか獣人とか色々いましたけど」

学生多いもんね。みんなそんなにネットゲ好きなのかな？
その問いに先輩が答える。

「それなら既に調べた。種族は人間、装備無し、容姿はそのままで魔力やスキルに関しては我々と同じだ」

「そ、そうですか……」

いつ調べたの！？

「朝5時に起きてからすぐにな」

心を読まれた！？

「さて、それでは下階の住人とも話をつけなければな」

先輩は立ち上がり、身支度を始める。

ああ、私は何の当番だろ。やっぱり炊事や洗濯かな。
なんて考えていると先輩に声をかけられた。

「真里亜。出来れば天使である事は隠しておくんだ」

「なんでですか？」

不思議に思い首をかしげる。

「おお、意外と可愛いしぐさをするな」

「ば、馬鹿な事言っていないで理由を教えてください！」

ジト目をするが先輩には効果なし。

「お前のサービス特典の事を知れば、羨み、妬む奴らが出てくる可能性があるからだ」

そっすいえば聖君も羨ましそうだったな。

「見ているうちはいい。だがこちらに危害を加えてくる可能性もある。この様な状況下で余計ないざござは避けるんだ。聖君もいいかな？」

「はい！誰にも言いません！」

「うん。では行くか」

第3話「エルフの失くしたモノ」

部屋を出た後の梅森先輩はすぐに、マンション一階にある、管理人さんの部屋に向かった。このマンションにある放送設備を借りて、今後の予定案を放送するためだ。

このマンションは全部で187世帯の人が住んでいる。

6割が学生で4割が社会人。学生の3割が大学生で7割が高校生。社会人の5割は家族で住んでいて多くが3人暮らし、残りは一人暮らし。

（男女比は半々。家族世帯は両親と小学生程の子どもである。）

要するに、高校生：78人、大学生：34人、社会人（一人）：37人、家族暮らし：114人、合計：263人。

これだけの数の人がここに住んでいる。先輩はこの人たちを体力や知識などを考慮し、補給班・生活班の二つに大きく分類。

補給班は周辺の探索、飲料水や食料の調達が主な仕事だ。

生活班は主に炊事を担当する。263人分の生活物資の管理・計算をする。

この2班を役割ごとにさらに細分化し、各々リーダー及びサブリーダーを選出し事に当たる。

先輩はこれらの説明を放送し終わると、『自身や周囲の判断で補給班、生活班に分かれてくれ』と言い残し、放送を終了した。

最初私は、皆が指示に従ってくれるかどうか心配だったけどそれは杞憂に終わった。

管理人室から出て中庭から上を見上げると、住人がそれぞれの班の指定された集合場所にぞろぞろと移動していくのが見えた。

この時私は先輩のカリスマ性に驚いていた。ただの変人じゃなかった。カリスマ的な変人だった。

「真里亜さんはどっちの班に行くんですか？」

「私は生活班かな。料理ならそれなりに出来るから」

「僕も生活班じゃ駄目ですかね？」

「料理出来るの？今ある食料で今後どうやってやりくりしていくか、考えないといけないよ。栄養バランスや一食の配分とか。それに聖君男の子でしょ。体力のある人手が多いに越した事は無いんだから、補給班の方がいいと思うけど」

「…………じゃあ補給班でいいです」

「頑張れ！男の子！」

その後、補給班の集合場所に移動する聖君を見送ってから自分も集合場所に移動するべく足を動かす。

僕は真里亜さんと別れ、梅森さんと一緒に実働班の集合場所に指定した一階のエントランスホールに移動した。一階は上の階よりもずっと大きく楕円の形をしていて、管理人室や郵便受、別館にある駐車場へと続く通路などがある。

「はあ」

思わずため息が出る。“真里亜さんと一緒にいたい”とさり気なくアピールしたが普通にスル　されてしまった。やっぱり年下だからなのか、年上じゃなきゃダメなのか？

「おまえ、真里亜に惚れているのか？」
「のわぁー!？」

考え込んでいたら、梅森さんの心を読んだかのような発言に変な声を出してしまう。

「い、いきなり何を言ってるんですか！」
「違うのか？」
「違いますよ！確かに好きですけど、そういうのじゃなくて憧れと言うか何と言うか……」

最後の方は小声でボソボソ言っており良く聞き取れない。

「そうか。それは野暮なことを聞いたな」
「そうですよ。ビックリしたじゃないですか」
「ふむ。あいつは引き籠もってさえいなければ彼氏の一人や二人はいてもおかしくは無いからな」
「そ、そう何ですか!？」
「ああ、愛嬌のある容姿に人当たりの良い性格、気配りもできる。人から好かれる要素は持っているだろう。まあ今は、あいつがいつもの様に気合を入れて創ったアバターの姿をしているがな」

普通に考えれば気づくであろう事に今まで気づかなかったバカ一人自分と同じく引き籠もり気味な真里亜を、容姿は普通でまったくもてない自分と重ねていたのが悪かった。

高校生になってここに引越してきた日に真里亜に会い。

勉強を教えてもらったり、MMORPGという同じ趣味があったと分かったりして。

偶にご飯をご馳走になったりしているうちに、気づいたら好きになっ
っていた。

この時期にありがちな年上女性への憧れなのかもしれないが…

そういえばこの身体もあの時、いつものMMORPGと時と同じ様に、いくつもある設定を決めてこのエルフを創って……

やっぱりゲームのキャラの格好してるから、ここはゲームの中なのか？

そういえば、どこかの国のなんとかって会社がVRとかいう技術を開発してるってネットに書いてあったな。

これがそうなのか？てゆうか、寝てる間にどうやって？

よく漫画や小説なんかトリップ物があるけどそれなのか？
だけど、マンションごと飛ばされるなんてあったか？

ああ、分かん。こういうのは賢い人に任せよう。

そんな事を考えている間に、それなりの人数が集まってきた。

主に男性、時々女性。多くがエルフや獣人、人間でドワーフは少ない。

既婚者の人はそうでもないが一人暮らしは大概姿が変わっている。
どうなっているんだ此処の住人？

梅森先輩は集まって来た人達の中で、外見が変わってしまっている人達から本名を聞き出し、名簿に記入している。

それが終わると皆の前に出て

「うむ。此処に集まってくれた皆には感謝しよう。さっきも説明し

たが現状を理解しているものはいないだろう。私も分からん」

ですよ〜

逆に分かってたらそれはそれでビックリするけど……

「水や食料は数日分しかない。このまま現状の改善が見られなければ、我々は餓死する!」

でしょうね……

「そこで何よりもまず水及び食料の確保が優先になつて来る。混乱している者もいると思う。しかし現状の調査をするためにはまず、生きねばならない!」

アナタ、普段何してるんですか?

「そこで此処に集まってもらった皆で、協力してそれらの搜索・補給をしたいと思う」

「いいぞ、チビっ!」

「協力します!」

「分かりました」

「つーか。お前誰だよ!」

「どこにあるんでしょうね」

梅森さんの声明に対して住民から様々な言葉が出てくる。

一部ガラの悪い人がいたが気にしない。

「それでは3〜4人のグループを作り私に報告してくれ。30分で準備したのち、随時出発する。その際、車を持っている者はなるべく

く固まらないようにしてくれ。木々の間にかなりの余裕があるからな、移動は車の方がいいだろう。また、周囲にどんな危険が存在するか分からない。各自細心の注意を払ってくれ。遅くとも12時には此処に集合するように。以上」

それを聞いた住人は、細かい質問のある者を除き各々グループを決め、自室に準備のために戻って行った。

そういう僕は梅森さんと同じグループになる事が決まっていたので、質問の受け答えをしている梅森さんが解放されるまでは『ステイ』だ。

「ひーじーりーくーん」

そんな時、後ろの方から僕を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると超絶金髪美女が僕を探し歩いていた。

「誰！」

腰まで届く太陽の如き暖かさを感じるブロンド。

身体の半分以上ではないかと思える、長くスラッと伸びた足。

自分と同じ麻の様な服を身にまとい、その存在を全力全開でアピールする母性の塊。

長く上がった耳を持つ美人。^{エルフ}

エルフの知り合いなんていないのでアバターなのだろうが自分の事を『ひーじーりーくーん』などと呼ぶほど仲の良い女性^{ヒジリ}は聖にはいない。

真里亜がいるが、彼女は銀髪天使だ。

さあ、どうする？

思い切って話しかけるか……。

でも彼女いない歴〃年齢の僕に女性に話しかけると？

でも、向こうは僕の事を探しているみたいだし……。

一体どうすれば……

「ああ、聖ならそこにいるぞ」

「そうですか。ありがとうございます」

Noooooooooo!

梅森さん何やってるんですか！

うわっ！こっち来た！

まだ心の準備が……！

「こんにちは。あ！まだおはようの時間だったね」

「おおお、おはようございます！」

「ふふ……。そんなに緊張しないで。リラックス、リラックス！」

「は、はい。あの……僕を探していたみたいですけど、どなたですか？」

「えゝ分かんないのゝ。それに、探しているって分かってて声を掛けてくれないなんて。聖君って結構鬼畜？」

「えっ！あ、えっと。ごめんなさい」

僕が頭を上げると、エルフのお姉さんの顔には笑顔が無かった。

次第に眉間に皺しわがより、今にも吐きそうなほど顔が青い。

「大丈夫ですか！？」

あまりにも急な変化にどうすれば良いか分からずつろたえる。

「やべっ……やってもらうのは良いのに、自分でやるとか……しかも男に……ないわ」

「はい？」

突然訳の分からない事を口走ったお姉さんに、思わずアホな声を出す。

「分かんねえのか？俺だよ、柳原 光だ」

「は？」

酷く気分の悪そうな顔で告げる。

柳原 光？それはこのマンション内で同じ高校に通う唯一の友人の名前だ。

この人が光？

まてよ……。確か光は『なんでゲームの中でも男の顔を見なくちゃいけないんだ！』などと、常日ごろから言っていてアバターは大概女キャラの……。

「オマエ。何やってんだ……」

「やっと気づいたか。ほら、オマエを脅かそうとして……」

「脅かそうとして？」

「何か大切なモノを失ったところだ」

「は？」

「聖もやれば分かる。そしてさっきのをデフォルトでやっているお姉さんを敬え！」

「誰がするか！あんな事！」

間違いない。声が女の人みたいになっているが紛れもなく光だ。お姉さんフェチの光だ。

「光はいつものように女キャラか……」

「おう。ビックリしたぞ、起きたら巨乳美人になってたんだからな」
腰に手を当て得意げにカラカラと笑う。

それで、微塵も驚かなければ称賛に値するよ。とか何とか思っていると背後から梅森さんが現れた。どうやら質問タイムは終わったようだ。

「すまない、待たせたな」

「いえ、気にしないでください。それで僕らは誰と同じグループに
なんですか？」

「残っているのは私たち3人だけだ。よって必然的に我々で1グループだ」

辺りを見回すと確かに僕ら以外誰もいなかった。
変に知らない人と同じになるよりはいいか。と思ったが梅森さんも
数時間前まで赤の他人である事を思い出す。

「貴方はさっきの小さい人！」

光が驚いたように見降ろす。倍近い身長差があるのだから仕方がないが……。

「自己紹介が遅れたか。私は梅森 仁という。よろしく頼む、柳原
光君」

「何で名前を！エスパーですか！？」

今度は大きく目を見開いて見降ろしている。
さつき名簿にチェックされてただろ。というツッコミは心の中にしまっておく。

こいつはバカなので、一々相手をしていたら疲れるのだ。
ていうか、梅森さんも『ふっ』みたいな顔してないで否定してくださいよ。

「あの〜それで僕らはこれからどうすれば？」

「ふむ。私たちの中で車の運転が可能な者がいない。よって運転手のスカウトに向かう」

たしかに僕と光は免許も車も無いし。梅森さんは車はあるらしいけどこの体型サイズじゃね。

「誰か心当たりでもあるんですか？」

そうだと良いなと思いつつ尋ねてみる。

「何人かいるが、まずは真里亜だな。真里亜なら免許も車も持っているからな」

そう言っていると梅森さんはそそくさとエレベーターの方に歩きだした。その後を光と共に追おうとするが、不意に光に呼び止められる。

「何だよ？」

「真里亜って誰だ？」

「誰って……」

ああ言ったら叫びそうだな。と思いつつも教える。

「光の大好きなお姉さんだよ」

その後、『キター』と叫ぶ女エルフが確認されたとか……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2802w/>

インドア天使

2011年10月9日15時55分発行